

これからの設計者のキャリア構築を考える

は
じ
め
に多様なアプローチに学び視野を広げ
主体的にキャリア構築を

編集部

空前の売り手市場が続き、企業が人材の確保に苦慮する一方で、最近「今後、終身雇用を続けていくことは難しい」といった趣旨の発言が経済界のリーダーから相次いでいることは多くの人が知っていることだろう。これは一見、矛盾しているように見えるが、第一線の現場を円滑に運営するために若い社員が必要であるとともに、現場で活躍できない高年齢の社員を大量に抱え込んでいることで総人件費が増し企業経営を圧迫することへの危機感の表明と見れば容易に理解できる。

企業を取り巻く環境が厳しさを増す中、設計技術者といえども終身雇用を前提としないキャリア構築を模索しなければならない状況に直面しているといっても過言ではない。企業の側も従来とは育成の方向を変えていかないと、時代に合ったスキルを持たない社員を大量に抱え込む事態となってしまう。

このような時流の中、最近の技術者のキャリア構築は多様化している。企業に所属して、すぐれた成果を上げて着実にキャリアを形成している技術者が存在する一方、ベンチャー企業を立ち上げたり異業種に転職したりして、新たなキャリアを構築している技術者も目立つようになってきた。ただ、いずれの場合でも技術者に製品開発をリードできる力が備わっていることが不可欠である。この部分を押さえつつ、今後技術者はどのようにキャリアを形成していくべきであろうか。そして企業は技術者にどのような支援をしていくことが開発力や設計力の強化につながるのだろうか。

本特集では、これからの時代の技術者のキャリ

ア構築について有識者から提言してもらおうとともに、第一線で活躍している技術者へのインタビューを行った。さらに転職支援企業の幹部にこれからの時代に求められる技術者の条件を聞いた。

技術者としてのアイデンティティの確立

モノづくりに関する最新のITツール活用に関するコンサルティングを行う傍ら、『AI時代を生き残る仕事の新ルール』『あと20年でなくなる50の仕事』などの著作を持つ水野操氏は、これからのキャリアについて、組織に捉われることなく、他人に対して自分のアイデンティティを確立することと考え、そのための考え方と具体的に身に付けるべきスキルを説明する。併せて、意識して自分の経験をつないで、スキルの掛け算をしていくことを推奨する。

“良い仕事”で会社や社会に
貢献して自己実現

企業で技術者としての勤務経験を持ち、その後独立し技術士として活躍する傍ら製造物責任や機械安全など、技術と社会に関するさまざまなテーマに取り組んでいる佐藤国仁氏は、本誌で連載中の「良い仕事」で、すぐれた仕事を成し遂げた技術者の足跡を辿り、業績を精査してきた。

技術者はキャリアを考えると、会社に貢献するとともに、社会にも貢献し、さらに自己実現す

るという道を目指すべきだとしている。

そのために技術者はどのように歩むべきかについて提言する。

第一線のプロフェッショナルからの直言

続いて、第一線で活躍している技術者に登場いただき、これからの時代に活躍できる設計者像について自らの経験を踏まえて語ってもらった。

ブルーイノベーションの那須隆志さんは大手メーカーの設計者からソフトウェアベンダー、コンサルタントを経てドローンのベンチャー企業に経営陣として参画した。それぞれの経験を活かしながら現在はソリューション担当役員として、大手企業とのアライアンスや社員の人材育成も担当している。開発と経営を結びつけ日々チャレンジを続けているフロントランナーの現在進行形のメッセージをお届けする。

電磁弁や温度・湿度調整技術を活用した装置を開発している伸和コントロールズでバルブ開発のリーダーを務めている松田幸士さんは、入社から3年後、学生時代に専攻した電気工学とは畑違いのメカ設計のチームに配属された。そこで勉強と経験を積み、実績を積んできた。他社との協業も経験し視野を広げた。現在は8人の若い設計者を指導する立場でもあり、情報と現実を結びつける訓練で設計者の育成にも注力している。その最前線を語る。

ファスナーなどのファスニング製品を扱うYKKで仕上工程用設備の開発・設計を担当する滝山博徳さんは中国向けのライン設備開発のプロジェクトリーダーなどを歴任し、現在は若手の指導や要素技術の強化に取り組む。

高品質な製品を効率的に作るために必要な設備の重要性を認識し、経験を積んできた。さまざまな困難に直面しつつも、乗り越えてきた経験を若手に伝えYKKのモノづくりを支える人材の育成に注力している。その軌跡をリアルに語る。

東芝メモリの半導体プロセスインテグレーション技術者の角田弘昭さんは、周囲と摩擦を起こしながらも新規性に徹底してこだわり世界屈指の

NAND型フラッシュメモリの工場へと成長させることに貢献した。その経験から導き出された技術者のあるべき姿を語る。

パナソニックの岩田進裕さんはCAE技術者として多くの開発支援業務を経験し、現在は40数人のCAE技術者を率いる技術責任者である。成功と失敗の両方を経験し、製品開発の核心となる技術開発に関わってきた。また、貪欲にさまざまな考え方や知識を吸収し、それを発展させるなど精力的に業務のイノベーションに取り組んできた。自らの適性を考えて必要な知識をインプットし、業務で適用する秘訣などを語る。

デンソーで熱システムの開発に取り組んで成果を上げ、現在は機械・エネルギー開発部長を務めつつ、社内の技術伝承を担うデンソー技術会会長でもある八束真一さん。新たな技術開発の際に手計算で仮説を立て短時間で検証するサイクルを回す力を身に付けることの大切さを自らの経験から語る。

会社員から経営者、発明家としての道を行ってきた齋藤創造研究所 代表取締役社長の齋藤憲彦さんはアップルとの訴訟に勝利して、iPodに搭載されていたクリックホイールが自らの発明であることを証明したことで知られる。そのような発明はどのような発想から生まれたのか、日頃の活動や思考方法について語る。

充実したキャリアを歩むためのヒント

最後に一定のキャリアを積んだあとの選択肢の1つである転職を成功させるための考え方について、転職支援企業の専門家2名に聞いた。両氏が示す年齢層別に求められる役割は、自身の能力やこれまでの経験の価値を客観的に判断するのに役立つ。自分の望むキャリアを構築しようとしたとき、現在の環境で限界が見えれば、転職という選択肢も考えてみるべきだろう。転職活動を行う前に欠かせない、志望動機の明確化やこれまでの自身の経験の振り返り・分析など、考えを整理するためのポイントや実際の活動・活動後に留意すべき点についても語ってもらった。